

## 1990年代以降の奈良県林業の変化

### 2 回生 戸田紗也香

#### I. はじめに

奈良県は高級材の代名詞ともなっている吉野杉の産地として、吉野地方を中心に林業が盛んであった。その成立要因はいくつかあって、スギの生育に適した土壌、気候などの自然環境、吉野川、紀ノ川を利用して消費地である京・大阪へ移送が可能であること、灘・伏見で酒樽用材として多く利用されていたことなどが挙げられる。戦後は木材需要が高まり、その結果、吉野材は高級材として知られるようになり、全国の中でも高い地位を保っていたが、近年林業経営は大きく落ち込んでいる。

図1は奈良県の<sup>1</sup>生産林業所得の全国順位の推移を示している。これを見ると、1994年に全国で4位であった奈良県の順位は年ごとに下落し、2010年には全国で30位にまで下がっていった。全国的にも林業は衰退しているが、図1に見られる奈良県の衰退は特に顕著である。

本報告は奈良林業の地位低下に着目し、その原因を各種のデータ、現地でのヒヤリング調査をもとには考察したものである。対象期間は奈良県の林業地位の低下が進み始めた1994年以降とする。また、林業には国有林も含まれるが、ここでは民間林業、民有林を対象として分析を進めた。

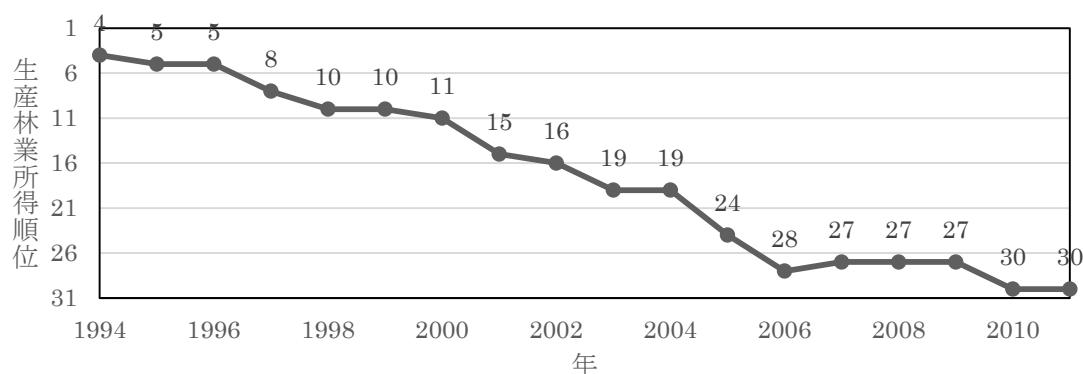


図1. 奈良県の生産林業所得の全国順位の推移

資料：平成24年奈良県林業統計

<sup>1</sup>生産林業所得は産出額に所得率を加えて計算される。所得は収益から経費を引き補助金を加えて計算される。生産林業所得とは林業で新たに生み出された価値、付加価値のことである。

## II. 奈良県における林業生産の歴史

奈良県の林業動向を検討する前に戦後における日本林業の変化をみてみよう。

第2次世界大戦後の日本ははじめ、戦災からの復興のため、その後は経済成長に対応するため多くの木材を必要とした。このため、1951(昭和26)年に丸太輸入関税が撤廃され、1964(昭和39)年に木材貿易は完全自由化された。当時は、国産材は品質管理が徹底されておらず、寸法精度にズレがあったり、乾燥水準が不十分で木材に反りや割れが生じたり、問題が多々発生した。そのような中、1970年代に品質のよい外国産の木材が国産のスギ・ヒノキより低価格で輸入されるようになり、人々は安くて使いやすい外材を使用するようになった。そのため、現在まで木材自給率は低いままになっている。

図2は1994年以降における国産材・外材別の木材供給量と自給率の推移を示したものである。これを見ると、日本の木材供給において外材が圧倒的に多く1995年で外材は供給量の5分の4を占めている。2009年でも供給量の3分の2以上が外材である。一方、木材供給率は2002(平成14)年まで次第に減っていくが、外材規制など国の施策推進の効果があり、その後は国産材利用が伸び、回復していった。

このように国内消費量の過半が外材によってまかなわれている状況ではその価格は外材に引きずられることになり、国産材の価格は低下した。

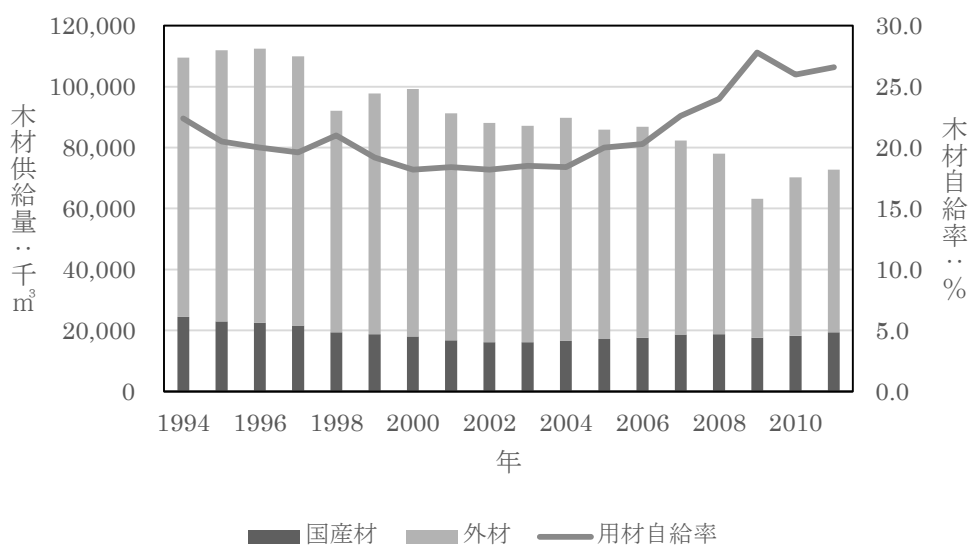


図2. 日本の木材供給量と木材自給率の推移

資料：林野庁「木材需給表」

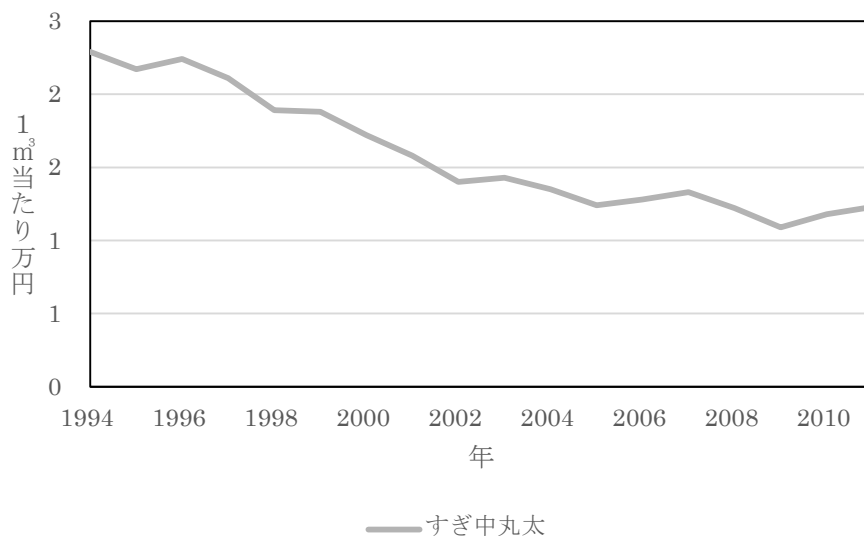


図 3. 全国のスギの価格の推移

資料：木材需給報告書

図 3 は全国の木材の価格の推移を示したものである。1994 年以降、スギの価格は 2 万円から 1 万円へとほぼ半減している。国内消費量の過半が外材によってまかなわれている状況ではその価格は外材に引きずられることになり、その結果、国産材の価格は低下した。

また、外材が流行した原因には国産材は個人経営で素材を生産しているところが多く、外材のように大量の素材を安定的に供給する体制が整っていないこと、森林の所有規模が零細で、生産・流通・加工の各段階が小規模でかつ、分散しているため、低コストでの供給体制になっていなかったこともある。これに対し、外材はアメリカ産を中心に商社を通して安定的に輸入される供給体制が整っていた。

以上の全国的な傾向を踏まえ、奈良県の特徴を見てみよう。

奈良県林業は、特に吉野地方で盛んであり、その中心は川上村、東吉野村、黒滝村の 3 地域である。この地域は土壌の保水性と透水性が極めて良好なことに加え、年間雨量 2000mm 以上、年平均気温 14℃、冬期の積雪 30cm 以下という気候、さらに山脈にかこまれているため台風の被害も少ないなどスギの生育に適した環境になっている。

記録によると、その歴史は古く、一般に吉野材が多量に搬出されるようになったのは 16 世紀後半で、秀吉が領有し、大阪城や伏見城などの城郭建築やその他の建築用材として普請された。この際の大量輸送は吉野川、紀ノ川が流れていたことから可能であった。

江戸時代に入ると、当地は徳川幕府の直領となった。1700 年頃、生活が成り立たせるため、土地の所有権と使用収益分を切り離す借地林業制度が生まれた。それが発達して「山守制度」という管理体制が生まれた。山守制度とは一般に、村外所有者が山林所在の地域住民の中から山守を選んで保護管理を委託し、山守は所有者に代わって労働力を集め、指揮管理して、木を育てるのである。この制度のため、奈良林業は民営、民有林が多い。

また、1720年頃には、灘・伏見の醸造業が発達し、酒樽の需要が高まったが、吉野杉は年輪幅が狭く均質で、木の香りも優れているうえ、酒漏れが少ないなど樽材として重宝され、名を知られるようになった。酒造りで有名な兵庫県の灘五郷の樽丸産地別調査記録の中で「吉野産は品質極めて良好にして、酒に色付けるには吉野産に限らるごとく、樽丸としてこれに優るものは他に見に能わざるなり」（「環境と健康を守る木の暮らし」より）と賞賛された。

このような特長が生まれたのは、「密植、多間伐、高伐期」の吉野の育林技術のおかげである。密に植えることで横への成長を抑え、多間伐で徐々に太らせることで、真っ直ぐで節目がなく、見た目がいい木材ができる。この育林方法は時間が長くかかり、間伐を頻繁にしなければならないなど労働力を必要とするが、現在でも吉野材にはこの特質が受け継がれている。

このような環境、手入れのもとで育った奈良のヒノキは淡いピンク色、スギは鮮明な赤色と、ともに温かみのある色合いをしている。ヒノキは硬い素材のため、敷居や柱などの家の土台に使われ、スギは鴨居、長押、回縁、天井版など木目が見える場所に使われる。

上述したように、戦後は復興のための建築用材として木材の需要が高まった。奈良の木も戦後直後需要が高まり、価格が上がった。特にヒノキは家の基礎を作ることに必要なため、価格は杉より高く、北部で造林が行われた。

図4は奈良県を3地区に分けそれぞれの地域におけるスギ、ヒノキの蓄積量を表している。これを見ると、奈良県は全体としてスギの生産が盛んであり、歴史の古い南部の吉野地域、北山・十津川地域ではスギ、ヒノキの比が3:1であるのに対し、戦後にヒノキの造林が行われた北部では両者は半々になっている。

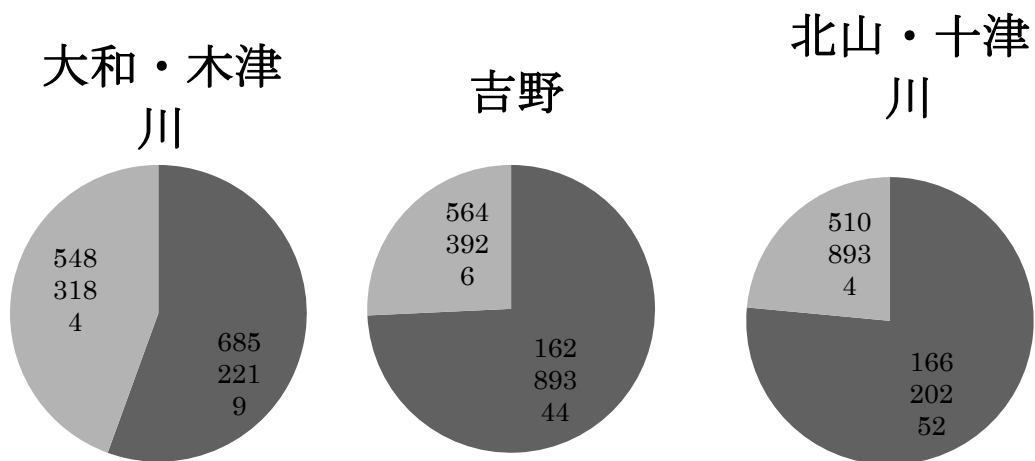
### Ⅲ. 奈良県の現状と課題

以上、奈良県林業の成り立ちとその特徴を概観したが、ここでは価格動向を中心として現状を見てみよう。

図5は先に示した図3に奈良県産のスギ価格の推移を加筆したものである。これを見ると、奈良のスギは全国平均より高く、1996年には2.5倍近い価格差があった。これは奈良のスギが真っ直ぐでくろいがなく、耐久性に優れているため、建築用高級材として価値が高かったためである。しかし、これ以降奈良のスギ価格は急激に低下し、2011年には全国とほぼ同じになっている。

次にスギとヒノキの価格を比較してみよう。図6は奈良県のスギとヒノキの価格の推移を示している。これをみると、ヒノキはスギの価格より高いこと、両者ともこの20年間下がりを続けていることなどがわかる。このうちヒノキは1996年に12万円であったが、2010年には約3万円と4分の1に下がっている。スギの価格も同期間に下がっているが、ヒノキとスギの下がり具合を比べたらヒノキの価格の低下は大きくみえる。これは木材の土台としてヒノキが使われることが少なくなったためである。

以上見たように、奈良の木材は美しく丈夫な木材を育てようとする先人の長い努力により、建築用材として優れた評価を与えられ、価格的にも優位であったが、近年はその価格低下が顕著である。



単位：m<sup>3</sup>

図 4. 奈良県の 3 地区におけるスギ、ヒノキの蓄積量

資料：平成 24 年奈良県林業統計

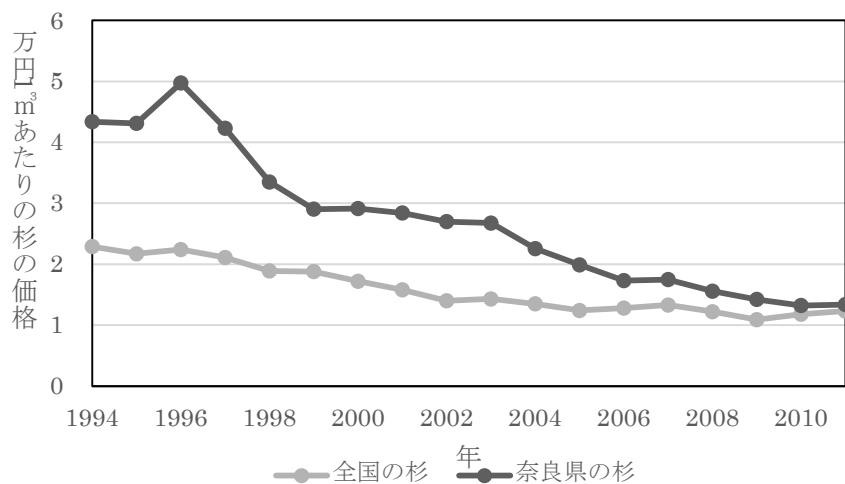


図 5. 全国と奈良県の杉の価格

資料：木材需給報告書

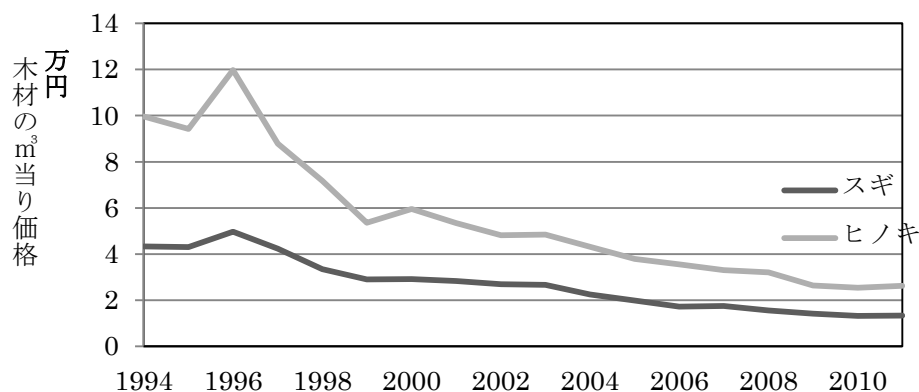


図 6. 奈良県木材の種目別価格の推移

資料：平成 24 年奈良県林業統計

この要因を考えるため、奈良県の木材がどのような用途に使われているかを見てみた。図 7 は奈良県の木材の需要部門別素材生産量推移を示したものである。これをみると、県産材の素材生産量は現在、ピーク時(1962 年)の 7 分の 1 にまで減少した。グラフに示した 1994 年から 2011 年の 20 年間でも約 25 万 m³ 減少している。このような大幅な減少が見られるが、その用途は大きく変化していない。すなわち、奈良県の素材需要はもともと高級材に頼った産業構造となっていたため、製材用材としての利用がほとんどで、この構造は現在も続いている。反対に見れば、奈良県の木材は製材用中心に生産されているため、他への使い道が少ないのである。

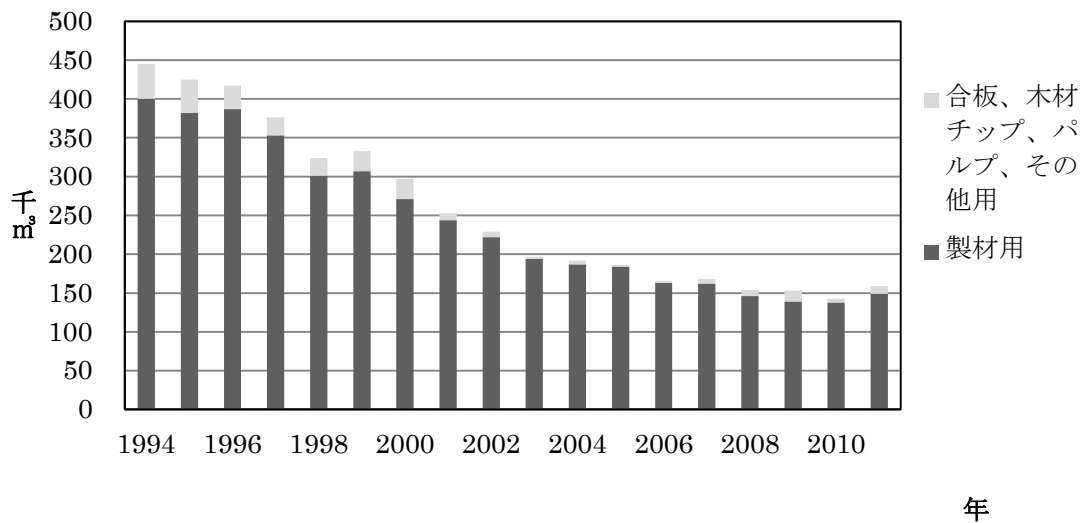


図 7. 奈良県の需要部門別素材生産量推移

資料：木材需給報告書

このような硬直化した生産構造は木材需要の変化の影響を強く受ける。例えば、日本では近年大都市を中心としてマンション建設の増加、戸建て住宅の減少が進み、木造建築が少なくなっている。また価格を重視する風潮から木目など見目の良さが軽視されることによって、木材への評価が変わり、需要が減ってしまったとも言われている。これらの結果、吉野材ブランドを中心に全国をリードする銘木の産地であった奈良県の木材は、特に高級材を中心として価格が急落した。価格の急落には外材の台頭も影響しているが、これに生産量の減少も重なり、奈良県林業は低迷を続けている。

こうした林業の低迷によって奈良県では様々な問題が起こっている。現地でのヒヤリング調査によると、植林して成長した樹木は伐採して使わなければならないが、労働力が減少しているため、手入れが行き届かず、山崩れなどの危険性も増加しているとのことである。

図 8 は奈良県の林業労働年齢階層別就業者数の推移を示している。これを見ると、この 20 年間に林業従事者は 2800 人から 1000 人へほぼ 3 分の 1 に減少している。このような労働者の減少に加え、高齢化も顕著である。すなわち、1990 年においてもすでに 50 歳以上が全体の 4 分の 3 を占めるなど労働者の平均年齢が極めて高くなっていた。2000 年も総従業者数 1600 人に対し 50 歳以上 1200 人でその比率は変わらないが 2010 年には 1000 人に対し 700 人で、その比率が若干低下している。これは高齢労働者のリタイアに伴うものと考えられるが、若年層の新規加入がほとんどなく、高齢化とともに絶対的な労働力が顕在化している。

このように若い労働者が少ないことは、人手不足に加え、技術の継承でも問題である。昭和期に造林された多くの森林資源は材採期を迎えている。また、吉野材は育て方の特徴が

ら密植されていて、細やかな間伐を行わないと良木が育たなくなる。このような中で、人手不足、技術の断絶は森林放置に繋がる。その結果、吉野独自の美しい木が育たず、木材価格の低下を招いている。また、高齢化によって労働事故の発生率も上がっているという。

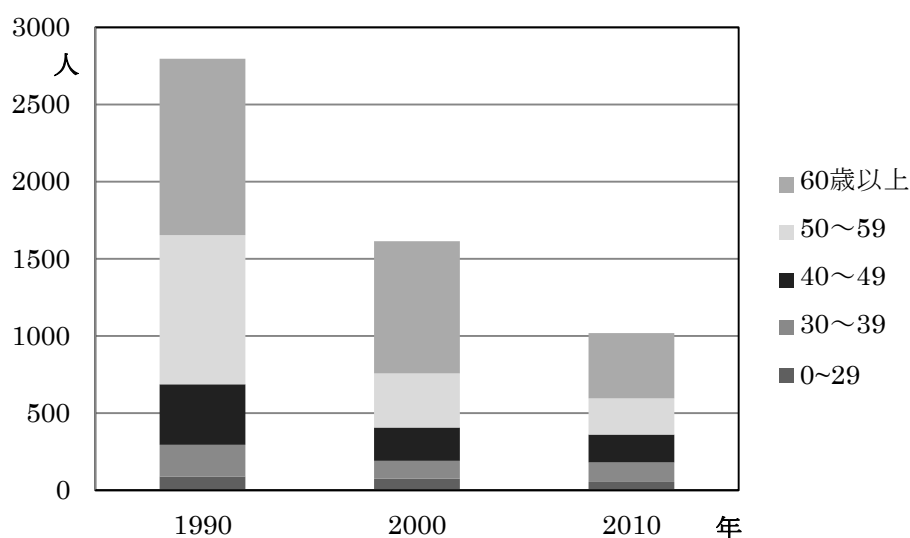


図 8. 奈良県の林業労働年齢階層別就業者数の推移

資料：平成 24 年奈良県林業統計

県は対策として奈良の木の良さを活かした公共建築物を増やすために 2012 年 3 月に「公共建築物における“奈良の木”利用推進方針」を策定した。この中では、端材も学校の椅子や机で利用することやまた、県産材使用住宅には助成金が支払われることなどが行われている。

CLT(Cross Laminated Timber)という木質材料を使った建築開発も考えられている。

吉野郡大淀町大字馬佐では県内初の木質バイオマス発電所が 2 年後稼働する。この発電所では未利用材を 50%、一般木材を 30%使用するが、これらは 1 t 約 7500 円で買い取られるので、林業経営に効果があると言われている。

「森まなび塾」など観光によって奈良県の森林を宣伝し、建材を使った家に興味を持ってもらうという活動も行われている。

#### IV. おわりに

本報告は 20 年における奈良県の林業の動向を統計データと現地調査で調べたことをもとに考察したものである。その結果は以下のようにまとめる。

1. 奈良県の木材は木目が美しく、丈夫で、全国の中で吉野スギは地位が高かったが、近年その全国順位は大きく落ち込んでいる。



2. その要因は様々あるが、第1に木材価格の低下がある。吉野材は建築用材として使われているが、マンション建設の増加、戸建て住宅の減少により、建築に木材が使われることが少なくなったため需要が減ってしまったのである。

奈良林業の衰退は奈良の木の特色が社会の求めているものと合わなくなったことに起因する。木に対する評価は時代とともに変わるのである。

林業の低迷は労働力不足や技術継承の問題を引き起こし、さらなる林業の衰退を招いている。このような現状に対して県をはじめ、森林組合、団体などは各種政策を行って、奈良の木をよく使用するように働きかけている。木質バイオマス発電所など効果が大きいと思われる。県、森林組合によるこのような動きが奈良県の林業にいい影響を与えることを期待する。

#### —付記—

本稿を作成するに当たり、奈良県農林部奈良の木ブランド課の内田亨氏、奈良県森林組合連合会の岩本太家治氏、吉野中央森林組合の坂本良平氏、桜井木材協同組合の松田憲昌氏には、お忙しい中にもかかわらず大変お世話になりました。ここに厚くお礼申し上げます。

#### —資料—

奈良県公式ホームページ <http://www.pref.nara.jp/>

林野庁ホームページ <http://www.rinya.maff.go.jp/>

「環境と健康を守る木の暮らし」吉野、北山・十津川流域林業活性化センター

「環境を守る森林と木材の働き」吉野林材振興協議会、吉野流域林業活性化センター、北山・十津川流域林業活性化センター

「木質バイオマス発電所概要」株式会社クリーンエナジー奈良、吉野発電所

「吉野林業」奈良県農林部林業振興課、南部農林振興事務所、吉野流域林業活性化センター

—

「奈良の木と暮らす」奈良県農林部奈良の木ブランド課